

2021. 10. 27 (水)

希望は外からやってくる

島村恭則

中国の大学院生との交流

今、コロナでできないことがいっぱいありますね。みなさん、コロナが収束したら、したいことがたくさんあると思いますけれども、私がしようと思っていることの一つは、中国に行くことです。今までコロナ以前は、よく中国の上海の大学の大学院のゼミとわたしのところの大学院ゼミの大学院生同士の交流をしていたのです。今日、この話を聞いている人は学部生の方が大半だと思うのですが、もちろんこれは、学部は学部でこのような国際交流をしたらいいと思うのですが、きょうは大学院の例で話します。

日本の大学院生たち、中国の大学院に行つて交流して帰ってくると、院生の人たちの顔つきが変わります。どのようなことかという、元気になって帰ってくるわけです。なぜかという、Twitterなどで見ると、大学院進学について日本ではすごくネガティブなことしか書いていません。つまり、特に博士後期課程などに行ったら職がないということが書いてあります。

大学院は博士前期(修士)課程が2年で、博士後期課程はその上の3年です。3年か、もう少しかかるかもしれませんが、全部で5～6、7年ぐらいかかるわけですが、大学院と

いうのは、専門的な勉強を学部でやった上に深めていくわけです。自分の研究を深めていくわけで、2年間の修士、マスターで終わって、研究者としての初歩的なトレーニングを受けただけでも民間のいろいろな社会で活躍するというように、修士だけで終わる場合もあります。しかし、もっと研究して、大学の先生などのいわゆる研究者になる、博士後期課程に行く場合もあります。

特に博士後期課程に行くのに、すごくネガティブなことがたくさん書いてあります。Twitterを見たら分かります。絶対に行かないほうがいいといったことが書いてあって、そこには、後期課程出ても職がないよということが書いてあるのですけれども、その話は後でしますけれども、ところが自分たちと全く同じように、同じ年齢で同じ分野の研究をがんばってやっている同じ大学院生がもちろん海外にもたくさんいるわけです。

そうすると、例えば中国の大学院生たちと交流すると、本当に同じ年齢で同じようなことをやっていて、ものすごくみんなが元気です。院生の数も多いし、我々が中国に行つて向こうの大学院のゼミに入れてもらおうと、すごくたくさん、30人ぐらい中国の院生たちが集まって来たりするのです。そこでゼミを一緒にやると、ものすごくポジティブです。

もちろん彼らにもいろいろな不安や悩みがあるのですけれども、でも何とかなるだろうと、好きな研究をして、世の中のためにもなっていきたいということで、実際に中国は今すごく経済が上向いていますので、社会全体が今日よりは明日のほうがいいことがあるだろうという雰囲気があります。なので、そのような中だからなおさらですけれども、もちろんそれぞれの不安や心配なども抱えながらですけれども、彼らはすごくポジティブです。

そのようなものに触れて日本に帰国する。今は日本だと LINE ですけれども、中国でやるときは WeChat で、翻訳機能があるでしょう。向こうから中国語でメッセージが来ても、こちらから日本語で送ってもすぐに翻訳してコミュニケーションがとれるわけです。そのように外に友達をつくってやっていると、もう一つの世界に自分のもう一つの可能性のようなものがものすごくあることがわかる。そうすると、院生たちみんなすごく元気になるのです。

それと、日本の場合は特に強いのですけれども、例えば研究発表などをどこかの研究会などで院生がしたとき、その時点で広がっている標準的な研究の方法、考え方から少しでも逸脱していると、コメントなどをしてくれる先輩や先生が、その時点での標準的な研究に引き戻そうとする。みんなと同じことをしないと危ないよ、といった雰囲気が結構あって、そうすると自分がまだ荒削りというか未完成だけれども、このようなことをやったらいいのではないかということと言っても、周りの人たちから引き留められてしまう場合などもあります。

あるいは、少し激しい言葉で否定のような

感じで言われることもある。そうすると、発表した院生、自分のやっていることに自信がなくなってきてしまう。そういう時に中国に行く。これは私のゼミ生、院生の実話です。行ったら、向こうでは話をどんどん聞いてくれるし、それは面白いなどと言って、それで評価されて、しかもそこの学会のようなところで研究発表をやったのだけれども、その時に、その日に発表した全員の中で最優秀賞を取ってしまったりしたのです。そうすると自信が回復する。自信をつけて日本に帰ってきたわけです。

そして、先ほど言ったような同世代、ほとんど同じ年の人で、元気な人たちが海外にはいる。そのようなことは、すごく効果があるわけです。別に中国だけではなくて、東アジアだったら韓国でもいいし、どこでもいいと思いますし、もちろんヨーロッパでもいいと思いますけれども、それで非常にポジティブになります。

ただ、最初に職がないというネガティブな話を紹介しましたが、これはある意味、事実です。研究者になるのはたしかにすごく大変なのです。だからそれがネガティブに書かれています。ただ、やり方をきちんとやって、例えば関学の社会学研究科で、そこを出て大学の先生になっている人は結構います。出てすぐに助教などで採用されたりする人もいるので、全く可能性がないわけではないし、きちんとやれば大丈夫なのですけれども、でも全体としてはものすごく不安をあおることが書かれたり言われたりしている。これについて、どのようにしたらいいのでしょうか。

外に出る

今私が言っていることを聞いていて、そのようにポジティブになるのはいいけれども、気分はポジティブでも、実際は大変なのではないかと思われるかもしれません。そこは少し発想を変えて、例えば社会学部の赤江達也先生は関学に来られる前に10年間台湾の大学で、日本の大学院を出た後で教えておられました。そして、10年後、関学社会学部に教授として移って来られました。赤江先生は、10年でしたけれども、私の場合も30代の前半の頃に韓国の大学で3年半ぐらい教えていました。それもたまたま職があって日本に戻って来てしまったのだけれども、そのままずっといても楽しかったと思いますし、つまり海外にも選択肢があるということです。

例えば大学院を出た後に、ポストドクターという言葉聞いたことがあるかもしれませんが、博士後期課程を終わる時には博士論文を書くわけです。ポストドクターとは、博士になったけれども職はまだありませんといった段階での、武者修行のようなので、国内で、例えば関学で博士号を取ったら、その後どこか、例えば東京の大学でもどこでもいいです。仙台の大学でも行って研究員として修行のようなことをするわけです。これを国内に限定せずに、海外に行くという選択肢がある。たとえば、中国の先生から、5つぐらいポストドクターのポストがあるので、いつでも言ってくれたら採用しますよ、給料も、ポストドクターの給料は中国はすごく今給料がどんどん上がっていて、大体聞いてみると、日本の制度、日本の中でポストドクターという博士を取った後ぐらいでもらうお金の20

万弱ぐらいと同じ額をくれるのです。研究費は実をいうと日本よりも多分多いです。

恐らく、そのうちもっと額的には抜かれるのではないかと思うぐらいの状況で、でも、言葉はといたら、それは中国語ができなくてもいいよと、英会話はできるでしょうと。博士号を取っているのだから、自分の博士論文を中国語に翻訳したり、最初はそのようなことから始めればいいのです、中国でも発表すればいいという、内容のほうが大事と、それで、でも買い物ができるぐらいの中国語を勉強してねという感じで言われるわけです。

だから、本当に行けばいいのです。私だって院生だったら行きたいです。つまり、活路は別に国の中だけではない。日本の中のことを否定しているわけではないのですけれども、外にいろいろとつなげていけばいくらでも可能性はあります。ポストドクターで中国に行き、そのあとそのまま中国で大学の先生になってしまったっていいではないですか。先ほどの赤江先生は台湾、私は韓国ですけれども、というように、外に希望の源を求め、外に出て外との関係をつくりながら自分の希望を見いだしていくということは、十分可能性があると思います。

少し逆戻りで先ほどの話に戻してしましますが、大学院進学、特に博士後期課程進学については新聞などでも否定的なわけですが、大学院に行っても将来が不安だよ、といったことを本当に朝日新聞などに書いてあって、大学院生の声などといって書いてあるのですけれども、そこには、ポストドクターや就職先として外に行く、海外に行くことはまったく書いていないのです。その記事を検索して読めばわかるけれども、これは本当に驚きます。私が言ったような、海外に行けばい

くだけでも可能性があるといったことを全然書いていないのです。これは大きな問題だと思います。

コロナで特に内向きになっていますけれども、ぜひここは外に向かって目を開いてほしいです。関学社会学部の先生は、海外にいた先生がすごく多いではないですか。例えば留学で海外にいたり、打樋先生もイギリスにお

られたでしょう、というように、外に出て行くことが持つ可能性について深く共感してくれる先生は多いと思いますので、ぜひこの学部で学ぶ機会をそういうチャンスにしてほしいと思います。というわけで、希望の力は、外に目を向けたときにも出てくるということについてお話ししました。

(社会学部教授)